第7巻1号　　2003年4月1日発行

Management System News

INTERNATIONAL QA INSTITUTE　　国際品質保証協会・ISO-MS研究会 機関誌

第11回 ISO-MS研究会の年次大会風景
（於 東京都北区 赤羽会館にて）

目　次

巻頭に寄せて　1
情報セキュリティマネジメント規格　2
　BS7799-2:2002の改訂に寄せて　3
第11回ISO-MS研究会年次大会報告　4
米国における監査員倫理への関心　5
94年版の後遺症いつまで続くのか？　6
最近感じたこと　7
新刊優秀図書の紹介　8
事務局から　8
編集後記　8

巻頭に寄せて

会長　三浦 昭夫

中東でついに戦争が始まり、ほかでも国際情勢の不安が高まる一方だが、ISO認証の世界でも、海外のある審査登録機関（D社としておく）が最近RABから倫理違反で資格を剥奪され、D社から発行された証明書はすべて無効ということになった。RABは世界最有力の認定機関であり、IATCAの会長を最近二代続けて出しているくらいだから、このことは全世界に伝わって、D社はまともな国からは永久追放になることだろう。D社は数年前から日本に上陸して違反行為を重ねていた。日本では、外資系も含めて多数の審査登録機関の不正がまかり通っているのに目をつけて、日本の先輩機関に見習って、そのやり方を本国でも実践したからこうなったのだろう。

今年の1月、監査では世界第一級のプロであるASQのDennis ArterとJP Russellの両氏から「監査及び企業倫理について講演するから何か一言」と頼まれ、数年間IATCAやRABの規定作成に協力したほか、特命で倫理当番までさせられてきた過程で考えついたことを論文にまとめて提供した。その要点は、礼儀作法、姿勢、倫理・道徳などというものは、小うるさいことを並べ立てて他人を取り締まったり裁いたりするためのものではなく、世界中で古来からの生活の知恵ではなかろうかということである。礼儀作法、姿勢については、私も武術の道場や学校の体育会で叩き込まれ、最初は皆と同様に道場と会社だけで怖い先輩に対する「保身術」として励行していたが、今頃になって判ったことは、作法と姿勢は健康に良いということである。姿勢を崩したり行儀を悪くしていると楽なようでも体調がおかしくなる。歩行中の喫煙も同様。しかし、姿勢や行儀を良くしていると非常に具合が良い。では倫理・道徳はというと、身体の健康とは別の次元につながっていて、守れば得るものが大きく、守らねばRABや法律の処罰だけでは済まされないひどい目に遭うということである。守る守らぬは本人の自由だが、『道徳』とは文字通り、徳(得)になる道だったかと気づいた次第である。

国際品質保証協会は、QAに関連する活動を通して日本の繁栄に奉仕・貢献することを目的として1991年に設立された任意団体で、米国品質学会日本支部やIATCA援助会員として国際的にも活動しています。ISOマネジメントシステムの効果的活用について総合的な研究の目的で1992年に同協会を母体としてISO-MS研究会が設立され、今日まで協会が全面的にその活動を支援しています。

情報セキュリティマネジメント規格 BS7799-2:2002 の改訂に寄せて

会員　齋藤栄二

最近とみに情報セキュリティに関する事故・事件が紙面を賑わしている。例えば、

・UFJつばさ証券の「顧客データ 1 万 1 千人分の流失」
・経済産業省のホームページの「改ざん」
・とある試験の合格者のホームページによる発表を前日に「覗き見」
・コンピューターウィルスによる事業活動の混乱

などである。

2002 年の一年間で情報処理振興事業協会 セキュリティセンター (IPA/ISEC) へ届出があったコンピューターウィルスの件数は 20,352 件(2001 年は 24,261 件)で、この原稿を執筆している最中(1 月末)にも、「ワーム」型ウィルス(瞬時に増殖し大量のデータを別のコンピューターに送る)"SQL スラマー"が猛威を振るっている。また、不正アクセスの届出件数は、年間過去最多の 619 件となるなど、インターネットを悪用した事故・事件が後をたたない。これらの事故・事件が発生すると、「企業・組織の信用が失墜」し、最悪の場合は、事業継続ができなくなる危険をはらんでいる。

こうした社会環境の変化の中、情報セキュリティに関する規格やガイドラインの制定が国内外で活発に行なわれている。その主なものを表 1 に挙げる。

表 1. 情報セキュリティマネジメントシステム関連規格・ガイド(2003 年 1 月末日現在)

	ISMS 仕様・要求事項(審査登録に使用可)		ガイドライン
ISO/IEC	規格化検討中		ISO/IEC 17799:2000
英国(BSI)	BS 7799-2:2002		BS7799-1:1999
日本	JIS	ISO 規格化後、検討予定。	JIS X5080:2002 (ISO/IEC17799:2000)
	JIPDEC(※)	ISMS 認証基準(Ver.1.0)	―

※JIPDEC:財団法人情報処理開発協会 (Japan Information Processing Development Corporation)

日本の ISMS 審査登録制度の動向 (2003 年 1 月末日現在)

ISMSの認定機関である JIPDEC によると、すでに6機関を認定し、現在、3機関を審査中である。また、審査員研修機関としては、6機関を認定し、現在、4機関を審査中である。

審査登録事業は 2002 年 4 月に開始され、72 組織が ISMS 認証を取得して登録されている。現在、ISMS 認証基準 Ver.2.0(改訂案)を公開して検討中にあり、2003 年 4 月 1 日から運用の予定である。

ここで、審査登録の規格として 2002 年 10 月に改訂された BS 7799-2:2002 について紹介する。構成は、ISO 9001:2000 とかなり似通っていて、経営者の責任、マネジメントレビュー、ISMS の改善に力点がおかれている。規格の序文、0.3 項「他のマネジメントシステムとの両立性」では、「この規格は、さまざまなマネジメント規格と矛盾のない統合された導入及び運用を可能とする ISO 9001:2000、ISO 14001:1996 と密接に関係付けられている」と定義されている。次に、ISMS の特徴について、キーとなる用語について解説する。

1)情報
情報とは資産であり、他の重要な事業資産と同様、組織にとって価値を有するものであり、それゆえに適切に保護される必要がある。保護する情報には、内部情報 、顧客情報、取引上のパートナーとの共有情報などがある。

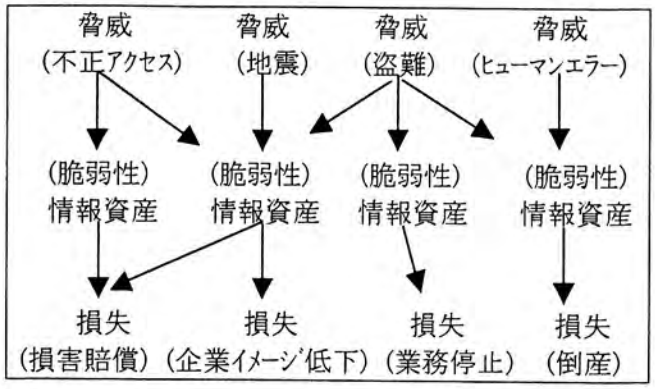
2)情報資産の 4 分類
①情報資産:データベース、データファイル、システムに関する文書・、マニュアル類、記録保管された情報。
②ソフトウェア資産:各種ソフトウェア(顧客納入品を含む)、開発用ツール、ユーティリティ
③物理的資産:コンピューター関連装置、通信関連装置、磁気媒体、その他の技術装置(電源、空調装置)、什器、収容設備
④サービス:計算処理及び通信サービス、一般ユーティリティ (暖房、照明、電源、空調など)

3)情報セキュリティ
事業継続を妨げないこと及び事業損害を最小限にすること、 並びに投資に対する見返り及び事

業機会を最大限にするために、広範囲にわたる脅威から情報を保護することをいう。

4) 機密性(Confidentiality):アクセスを許可された者だけが情報にアクセスできるようにすること。
5) 完全性(Integrity):情報及び処理方法の正確さと完全性を保護すること。
6) 可用性(Availability):許可された利用者が、必要なときに、情報及び関連する資産にアクセスできるようにすること。
7) 脅威(Threats):冒頭に述べてある一例の他に、天変地異、機器・通信回線の故障、データ消失、過剰な温度・湿度、電源異常、ソフトウェアの無許可使用、システム又は組織に危害を及ぼし得る出来事の原因、アタッカーの脅威、その他偶発的な脅威で、これらの影響を考慮する必要がある。
8) 脆弱性(Vulnerabilities):組織の資産に伴って存在する弱点のこと。例えば、無停電電源装置(UPS)をつけていないコンピューターは、停電という脅威に対し、脆弱性が高いと言える。

<脅威と脆弱性の流れ>



これらのリスクから、機密性、完全性、可用性(CIAと呼ばれる)を確保し、情報資産を脅威から「保護」し、事業継続を万全にすることが、ISMSの目的である。この目的を達成するために必要となるのが、ISMS の管理枠組みの確立と運用であり、リスク評価とリスクマネジメントが重要になる。

ISMS の管理枠組みの確立ステップを ISO17799:2000 から一部引用すると次のようになる。(このステップは単なる枠組みであり、その順番は企業・組織で決めてよい。例えば、リスク評価を行なった結果で方針を決めてもよい)。なお、このステップは繰り返して行なうことが肝要である。

ステップ 1: 方針を定める
ステップ 2: ISMS の適用範囲を定める(場所、組織、情報技術、情報資産を特定する)
ステップ 3: リスク評価(情報及び情報処理施設・設備に対する脅威、影響及び脆弱性の評価、並びにそれらが起こる可能性を評価する)
ステップ 4: リスクを管理する(許容されるコストで、情報システムに影響を及ぼしかねないリスクを識別し、管理し、最小限に抑える又は除去する)
ステップ 5: 実施する管理目的及び管理策を選択する(BS 7799-2:2002 では 127 項目)
ステップ 6: 適用宣言書を作成する

リスク評価の過程で抽出された管理策のうち、できるものは即実施する。すぐにできない管理策は、実施計画と責任者を決め、進めるとよい。ほかには、
① リスクの移転(保険加入など)
② リスクの受容(リスクスコアが低い場合など)
③ リスクの回避(特定業務は行なわない)がある。
③は、ビジネスチャンスを失うおそれがあるので、採用する場合には、充分な評価が必要である。

いずれにしても、ISMS は企業・組織で事業を運営する上で重要であり、決して規格要求事項だから行うというものではない。特に、情報セキュリティ施策は莫大な資金を要することがあるので、事業継続を優先して取り組まなければ意味がないだろう。規格条文にある「事業継続計画」は「顧客志向していること」という点から意味は深い。3 章の用語の定義でも、「可用性」がはっきり定義されていることからも言える。利用者の使い勝手が悪くては、「使い物にならない」、「守れない」システムになってしまうのは、当然だろう。

なお、最後に、筆者が所属している組織で、情報セキュリティに関連する製品として、ネットワークセキュリティ、無線決裁システムなども取り扱っているので、そのホームページhttp://www.sii.co.jp/index_2.htmlで、製品情報 → 情報システムを閲覧して頂ければ幸いである。

第11回 ISO-MS研究会 年次大会 報告

IQAI理事／ISO-MS研究会副会長

瀧川 信敬

今年の年次大会は、「発表者と参加者とのコミュニケーションをコンセプトとした大会にしたい」という小林克俊事務局長の開会宣言を皮切りに、東京都北区赤羽会館において12月6日(土)13時より始まった。

第1部:開会挨拶及び年次報告

開会に際して、会長より、IQAI 設立の動機とこれまでに果たしてきた役割、及びIATCAにおける活動が説明され、当研究会への期待として、審査員レベルの向上、ISOスキームの普及・発展、会員相互の親睦などが述べられた。

そのあと、事務局長及び各担当幹事から、2003 年度の日程計画(合同研究会は4月5日及び9月6日、年次大会は12月6日、いずれも土曜日開催)、研究会会則の改訂、2002 年度の会計報告、会計監査報告が行われ、承認された。2003 年度の新しい計画としては、CPD につながる講習会を 2 月から実施することである。なお、今回の研究会会則の主な改訂内容は以下の3点である。

1) IQAIとMS研究会の関係を明確にしたこと。
2) 幹事会の権限と運用方法を明確にしたこと。
3) 退会ルールを明確にしたこと。

第2部:研究発表

第4分科会

「バーチャルプロジェクト」と題して、現在進行中の「建設業の ISO フォーラム」との共同研究、ホームページ、出版した「ISO9000 早わかり」の解説、2003 年度は「ISO9004+beyond」ー組織としてのパフォーマンス改善ーをテーマに取り組むこと、及び国庫補助金を得た研究プロジェクトを計画中であること等が報告された。

その中で、「ISO9000 早わかり」の解説において、経営の中での QMS の位置付けは、仕様、性能、数量、納期において顧客満足を得ることは当然のことながら、その製品を売って契約金を回収するまでを考えないと意味がない。「マネジメントシステムは財務から考えないと意味はない。プロジェクトは部分最適であり、マネジメントシステムは全体最適である。」と締めくくった小林元一副会長の説明が印象的であった。

第2分科会

「CQA 受験のための監査クイズ」と題して、全参加者に8問の CQA のサンプルクイズをやってもらい、各問題についての議論を行なった。"NOT"の入った設問に対応することの難しさ、日本人の陥りやすい問題などについて議論が出来たことは、CQA を受験する人だけでなく、一般の人にとっても興味ある事例であった。事務局長の目指す発表者と参加者との間の双方向のコミュニケーションという趣旨にも合致した新しい趣向の面白い試みであった。

第1分科会

「ISO9001／ISO19011の研究」ー多面的アプローチによる規格の立体解釈ーと題して、ISO9001:2000、ISO19011の研究結果が報告された。

ISO9001 の研究では、「日本語訳(漢字)はよほど上手に訳さないと却って誤解を与える」として英文を基に議論をしている。その結論として「経営者が『あいたたた・・・』と感じる適合性審査」とは何かという観点で議論し、いくつかの結論を得ていた。ISO19011 の研究は ISO10011 と ISO14011 とを比較することにより、ISO19011 への主な変更点を7項目にまとめて発表された。その中の特徴的なものは「監査員には適性(Competence)が求められ、この中に個人的資質が入る」について、「いまさら性格的なものを変えられるか」という疑問も出されていた。[三浦注:資質と適性が資格認定の一番の条件であろう。資質と適性に欠ける人は認定する必要がない。それが認定の審査基準でなければならない。]

2003年度の計画としては、ISO/TS16949、情報セキュリティー、リスク管理 (JISQ2001)、苦情対応管理(JISZ9920) などの関連規格の探求・探索と ISO14000 改訂規格の研究を行う予定である。[注:この関連で、2003年2月に CPD 対象の ISO/TS16949:2002 の講習会(5時間)を実施したものである。]

第 3 分科会

「監査技法の研究」と題して"ISO9001:2000 年版 QMS 審査の留意点"、"重箱の隅をつつく審査ときめ細かい審査との違い"、"勘(K)と経験(K)と度胸(D)における技法"について報告された。ISO9001: 2000 審査の留意点は分科会員からのアンケートを、QMS の8つの原則に基づいてまとめたものに加え、重箱の隅 vs. きめ細かい審査について参加者全員による事例の回答を分析することを計画していたが、時間の関係で後者は割愛され、分科会員からのアンケートをまとめたものだけが報告された。"KKD"は、これまで非科学的と考えられているものを前向きに捉えるとQMS 審査においても有用な側面を持っているとの意見をまとめたものであった。宮崎正治幹事は"おまけ"ですと発言していたが、"おまけ"というにはもったいない面白い発想の発表であった。

西日本支部

「パイロットの成果と今後の課題」と題して 9 月に行われた合同研究会の報告がなされた。合同研究会は新人活力を活用してマンネリ化した研究会活動に活を入れる方針で実施し、68 名の参加を得て成功裏に終了した。そのプログラムとしては

1. ISO9001:2000 を企業にどう生かすか
   西原美津子氏(副会長)
2. 地球環境と私たち
   吉田哲雄氏(ワイビーエム代表取締役会長)
3. ISO14001 の運用と経営革新
   吉村拓二氏((株)ふくや製造マネジャー)
4. コンクリートのひび割れ検出システム
   坂本敏弘氏(計測検査(株)副社長)

のメインテーマに、一瀬功幹事の司会によるパネルディスカッションが組まれ、研究会としては新趣向で望んだ合同研究会であった。

この合同研究会に対する満足度調査のアンケートを行って「とても良かった:66%」「まずまず:30%」「不明:4%」という分析結果を出していた。

会長総括

各分科会・支部の発表に対し、会長から次のとおり総括のコメントがあった。

「第 1 分科会の「経営者が『あいたたた・・・』と感じるような適合性審査」というのはとても面白い観点であり、内容もよかった。また、冒頭部分の発表者(石原隆昌幹事)のまじめだがユーモアのある考察も傑作だった。」

「第2分科会の試験問題のゲームは楽しんでもらえたと思うが、試験本番でもあの要領でこわがらないで気楽に受ければよい。」

「第 3 分科会のアンケートは面白い項目が多かったが、それらを単に羅列するのでなく、種類別に整理してシナリオ形式にまとめるとさらに面白くなる。」

「西日本支部は一瀬幹事の独特の楽しい発表による盛り上げで、全体のしめくくりに最適だった。」

むすび

全体を通して第 2 分科会の新趣向のアイディアもあり、大会に掲げた「発表者と参加者とのコミュニケーション」は比較的うまく取られ、事務局長の目指したコンセプトは一応成功したと思われる。

最後に、懇親会の席上で第2分科会の試験問題ゲームの結果発表で盛り上がり、その後事務局長から外部からの初めての参加者にコメントをお願いしたところ、いずれも「大いに楽しんだ」ということであった。今後はさらに視野を広げて内容を豊富にして行きたいものである。

米国における監査員倫理への関心

今年の 2 月に米国品質学会監査部会の年次大会が米国のネバダで開催された。プログラムの中で私の興味を引いた演題があり、業務の都合で出席できなかったため、大会後に、講演者の一人であった JP Russell 氏のウェブで講演原稿をダウンロードして目を通した。それは"Ethics and Enron" と題した 2 人のトークショーのような講演である。日本の新聞誌上でも連日のように報道されたエンロンの不正疑惑に言及して、内部監査員が果たしてその会社で"猫に鈴を付けられるか？"という問いに倫理の面から応えようとする試みである。 経営陣から監査員として指名されて臨んだ監査において、詐欺、着服、不正直といった不正の類をしていている事実が見つかり、現下のような不況下にあって仮に不正はなかったことにしてくれと言われたら、監査員の倫理というものがどれだけ役に立つか？という問いである。 どこかの国では、エンロンごとき不祥事は後を絶たないが、大勢の参加者がいる公開の場において、その国でこのような監査議論を交すことができるだろうか？と思ったものである。　　西原　美津子

94年版の後遺症いつまで続くのか?

理事　松本 好生

ISO 9001が2000年12月15日に改訂されて2年と4か月を迎えようとしている現在、新たに認証登録しようとする組織や 94 年版での既認証登録組織において、94 年版での後遺症があちらこちらで顔を覗かせている。ここでは審査登録機関に籍を置く一人として、2000 年版の要求事項をベースにして、その可笑しな一面をアラカルト風に掲げてみようと思う。

品質マネジメントの8原則

要求事項ではないが、組織のパフォーマンス改善のためにトップマネジメントがなすべきこととして ISO 9000 (JISQ9000):2000年版には、改訂の思想的背景とも言うべき 8 原則が示され、その中でも相変わらず無視しつづけられているのがh)項である。"Mutually beneficial supplier relationships" では、組織は供給者(外注先、購買先)と互いに発展していくような関係を持つことを勧めている。実態はどうか？発注元が小規模の外注先に対して○年△月までに認証取得／移行を強く要求。経営資源が潤沢な大組織ならいざ知らず、明らかに外注先を切り捨てるための口実としている実態が見え隠れする。認証取得で製品品質が担保されるのならともかく、目的化した認証取得が早くできた外注先を使うという論法は果してトップマネジメントの意向なのであろうか？

1999年9月の出来事

もう既に3年半前のこととなるが、ウラン燃料再転換工場での放射線漏れ事故の起きた頃、筆者が所属する組織の40周年記念の講演で話したことが、相も変わらず対岸の火事よろしくマスコミを賑わしている。それは次のような事項について話をしたのである。

- Compliance Program（法遵守）
- Contingency Plan（不測の事態への対応）
- Communication（情報の伝達）
- Emergency Preparedness and Response（緊急事態への準備・対応）
- Training, Awareness and Competence（訓練、意識、能力）
- Responsibility and Authority（責任と権限）
- Policy (Quality, Environmental, Security …)

組織としてはこの第1番目の事項をまず全うすることが求められていることであり、タイミングよく2000年改訂版の要求事項として5. 1項で明示された。それにもかかわらず、守るべき対象は"製品"に係るものと都合よく解釈しているケースが見受けられることは、相変わらずの"モノ質"管理の域を出ていない証拠でもあろう。

プロセス＝製造工程？

8.2.3のプロセスをモニタリング(状況観察・確認)する・・・・まだまだ製造工程を監視することと解釈していることが見受けられる。9001の4.1a)項において組織は必要な"プロセス"を特定したはずである。それにもかかわらずやはり "モノ" にばかり目が行ってしまうのは94年版までの後遺症か？プロセスのモニタリングは"計画した通りに結果が出せる"ように「目配り」、「気配り」そして「心配り」をすること。それこそ業務が意図したとおりに遂行できるようモニタリングする者としての適格性とは、それまでに培ってきた"業務経験"や"仕事の勘所"を最大限に活かすこと、そうでなければ PDCA はうまく回らないことを認識すべきであろう。

規格解釈は連想ゲームのように・・・

94年版までの審査／監査で多く見られた項目別、部門別の断片化した見方が相変わらず踏襲されていることが多々見受けられる。組織のしくみはいろいろなプロセスのネットワーク的結合で成り立っている。そこで例えば5. 1項の法規制を遵守することの関連で見てみれば、誰が(5.5.1)その情報を収集／整理(4.2.3f))し、どのようなルートで情報を伝達／共有(5.5.3)し、その情報を自己のものとして消化したかどうかの評価(6.2.2d))がなされ、これらの関連プロセス全体が意図した通りに遂行できているかをモニタリング(8.2.3)する・・・・というような関連付けがISO規格の構成に惑わされてなかなかできない現実がある。

94年版までのトラウマを立ち切ろう

亡霊のように過去の"モノ質管理"がまだまだ幅を利かせている現実から早く脱却しなければ、組織は投入した多くの資源を失い、認証登録制度自体も形骸化し、ひとり審査産業界のみが潤うという非常に可笑しな結末になってしまう。Quality life(すばらしい生活をおくる)や Quality player(多くのお客様を呼べる選手)同様に、組織は本来の意味での Quality シ

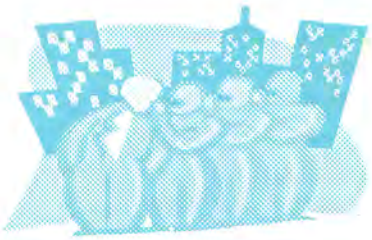
(8ページへつづく)

最近感じたこと

会員　立野　信之 CQA/CQE

出会いに感謝

今から約4年前、雑誌「アイソス」の記事を読んだことから全てが始まりました。それは、三浦先生が ASQ の CQA(公認監査士)、CQE(公認品質技術管理士)試験の紹介をされたものでした。「いつの日か世界で審査を」と夢見ていた私は、こんな資格があるのかと一気に引き付けられ、「よし、取組んでみよう」とさっそく、IQAI 事務局をされていた齋藤栄二さんへ連絡をとりました。齋藤さんは私の送った Fax に対して夜の 10 時半頃に返信をしてくれました。お忙しい中、夜遅く、見ず知らずの私へ返信して戴き、とても感激したことを覚えています。もしも、三浦先生があの記事を出されていなかったら、未だに MS 研のことも IQAI のことも知らないままだったかもしれません。三浦先生が ASQ 試験を日本で受験できるようにされたことには大変感謝しています。齋藤さんとのコンタクトから私は MS 研のことを知り、入会を申し出ました。快く、承諾して下さった小林先生、齋藤さん、暖かく受け入れて下さった会員の皆様にはとても感謝しております。



3 回目の挑戦で CQA にパス
CQE は幸運にも1発合格

試験勉強では時間を作り出すことと共に色々とわからないことが多くて大変でした。CQA を 2 回受けて落ちたときはどうしようかと思い悩んだものでしたが、あきらめなくてよかったです。こんな私がやってよかったと思えることが2つあります。

① 勉強では問題を多く解き、出来なかったことを理解するように努める(テキストをいくら読んでも問題が解けるとは限らない)。Quality Council of Indiana が出版している Primer の Solution Text や CD となっている Electric Exam を数多くこなすようにした(価格も安い)。

② 試験では問題への先入観や固定観念を捨てて、一問一問、頭をサラ*にして新たな気持ちで取組む。(*…(三浦注) 神戸弁で、「真新しい」、「完全な新品」。元は英語の thorough。)

次に挑戦しようと準備を始めた CQE は、なかなか難しく、許される勉強時間も少なく大変でしたが、以下に留意しました。

① Primer の Solution Text では奇数番号の問題をやって時間をかけずに全体の概要を掴んだ(約 200 問を半月くらいでこなせる)。その後、出来なかったところを ASQ が出している "ASQ's Foundation in Quality" で調べました。

② 試験時の持込み可能な教材として購入した自習用 "ASQ's Foundation in Quality" 全6冊には主要な箇所にインデックスを付け、試験時の検索が手早くできるようにしました。

審査員として目指すこと

ISO 9001 が 2000 年版へ移行になり、① 経営者の責任を持った主導、② 顧客満足、③ 継続的改善が強調されました。この考え方は、QMS 適合性はもとより、その有効性に重きを置いているものと思います。この実現の為、受審企業の暗黙の期待とニーズに応えて、企業の方向性を察知した審査にしたいものです。認証審査の行く末については、いろいろなことが言われていますが、私は当分の間は世界的な浸透を続けると思っています。発展途上国の台頭は益々盛んになり先進国が認証を求めることが考えられ、日本国内では中小企業にどんどん浸透しているからです。審査を通して(もちろん助言・指導は出来ませんが)企業に何をなすべきかを自発的に気づいて頂いて、本当に良かったと本音で言ってもらえる審査にしたいと思います。そのために、審査経験、MS 研や IQAI での研鑽を通して Competence (適格性)を高めるつもりです。IQAI や MS 研究会での研鑽は、大きなパワーと知恵を与えてくれます。また、ASQ の Code of Ethics (倫理規範)は素晴らしいですね。叡智がつまったものだと感心しています。私は、特に同輩・同列者に対して不公正な競争はやめてお互いの友好と仕事の上での信頼関係を広げるように努めること、というフレーズが好きです。

(6ページのつづき)
ステム／マネジメントシステムへ移行しようではないか。

終りに、ある組織の品質保証課長がいみじくも漏らしていた「2000 年版はもう我々の取り扱う範囲では対応できない。製品ばかりに目が行ってしまい、限界を認識した」という一方で、広報担当の方の「2000 年版への移行でやっと自分の役割がお客様との重要な接点として認知されるようになった」というコメントが大変印象的であった。

新刊優秀図書の紹介

昨年末から3月にかけて優秀な図書が発売されたので以下に紹介します。いずれも出版前に会長の三浦昭夫が著者から特別に審査を依頼されて加筆修正をしたもので、素晴らしい内容です。[注文:ASQ の website (asq.org)]

1. Quality Audit for Improved Performance, Third Edition
   著者 Dennis R. Arter 発売元 ASQ Quality Press
   過去15年に亘って体制監査関連では世界のベストセラーになっていた著作を、最近の情勢変化を反映して全面刷新改訂したものです。監査全般について平易な英語で簡潔・明快にまとめてあります。
2. Process Auditing Techniques: A Pocket Guide
   著者 J. P. Rusell 発売元 ASQ Quality Press
   プロセス監査について、これも平易な英語で簡潔・明確に記述され、薄いが充実しています。

事務局から

[ASQ 資格試験]

◆2002年10月19日(土)(東京)
CQManager(公認経営管理士)合格2名
Flemming Kongsberg
Jeff Catron (いずれも在日アメリカ人)
CQA-Bio-Med(医療器具公認監査士)合格1名
西原美津子(日本人で3人目)

◆2002年12月7日(土)(東京)
CQE (公認品質技術管理士) 合格1名
立野信之会員 (日本人で6人目)
本号掲載の受験談の記事を参照ください。
CQA (公認監査士) 合格2名
Paul C. Anderson
Larry Leisure (いずれも在日アメリカ人)

◆次回試験の会場はいずれも東京目黒の予定。
CQA/CQE/CSQE - 2003年6月7日(土)
CQManager/CRE/Six Sigma - 2003年10月18日(土)

[ASQ 年次大会(AQC)]

◆2003年5月19日－21日 (Kansas City, USA)

[IQAI 臨時総会]

◆2002年12月6日(金) 東京赤羽会館で開催。
今後 CPD 対象の内部研修を定期的に開催することを決定。 (山田 八栄 記)

編集後記

最初の読者としての編集後記、「情報セキュリティー…」では最終利用者を、これには危害を及ぼす人々が入りますが、組み込まないと元々成り立たないこと、「1994 版の後遺症…」では、Mutually beneficial supplier relationships の原則が実運用で無視又は忘れられてはいないかという疑問と"Quality"を品物の質と訳した誤解について、「最近、感じたこと」では ASQ の Code of ethics での Relation with Peers の項目への賛同が読み取れました。共通項は、interested parties と mutually beneficial ---、それと審査制度の問題でしょうか。

この号では次のことを考えさせられる良い機会になりました。特に、ISO の 2000 年版は品質マネジメントシステムの要求事項だからということで、審査側も「受審側のために審査するものだ」という錯覚をする恐れはないか。Interested parties の本来の意味:利害関係者ではなく「関係者、関心をもつ人々/集団」間の相互の利得(partnership にもつながりますが)への考慮が運用上忘れられてはいないか。本来の関係者ではなく受審側の利便に、堂々とすり寄る審査員/機関が増えると審査認証制度の崩壊につながる危惧が出てきます。審査機関又は研修機関が認定機関から、あなたの顧客は誰ですかと聞かれた時、「受審企業」と答えると「バツ」だという話を複数の人から聞いています。想定問答集めいて嫌でしたが、なるほどと思った記憶があります。

数年後には、「ISO 2000 年版のトラウマ/呪縛:受審側利害への過剰志向」といったようなことが問題視されるような気がしています。 (石原 隆昌)

本 部:〒745-0072 徳山市弥生町2丁目1番地
西原技術事務所 気付
Fax:0834-21-0716; E-mail:nishihara@iqai.org
機関誌発行／頒価:年 2 回／年間 1000 円
会長 三浦 昭夫 (有)国際品質システム
Fax:03-3712-3399; E-mail:miura@iqai.org
事務局代表 山田 八栄 (山田品質研究所)
Fax:046-262-7040; E-mail:welcome@iqai.org